

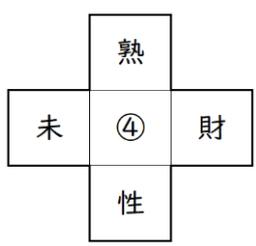
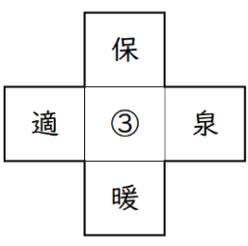
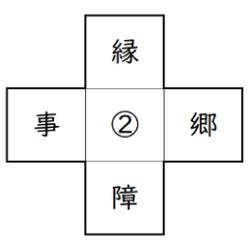
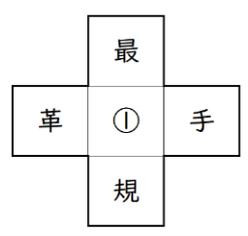
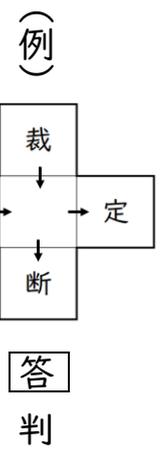
一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 バッターがダセキに立つ。
- 2 国語の授業でハイクを創作する。
- 3 呪文をトナえる。
- 4 ユウビン局に葉書を持って行く。
- 5 交通ルールを遵守する。
- 6 気持ちを奮い立たせる。
- 7 出納帳を作成する。
- 8 落ち葉が多くなり晩秋を感じる。

問二 例を参考に、中央の空白に漢字一字を加えて二字熟語を完成させなさい。また、①～④に当てはまる漢字を並びかえて出来る四字熟語を答えなさい。



## 二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

I

夏目漱石なつめ そうせきを読んでいて、なにか知らないことばに出会ったとしよう。たとえば仮に「花」だとする。ジッサイ①は、もっと難しいことばだろうから、最初は辞典を引く必要があるかもしれない。でも僕ぼくたちは、一度「花」という新しいことばを覚えれば、夏目漱石のその作品がよりよく読めるようになるだけじゃなく、次に漱石の別の作品や森鷗外もりおうがいや志賀直哉しがなおやに、「花」ということばが出てきたとしてもその意味を理解できるようになる。I、一般的な「読解能力」がアップしたということだ。

それだけじゃなく、「花」ということばを使って文章を作って自分の考えを表現したり、「花」という概念がいねんをめぐって考えてみることもできるようになります。II、「読む」力というのは、ことばを通して、「X」「Y」「Z」力や「A」「B」「C」力につながっているんだ。

なぜそんなことが可能なのかというと、ことばというのが、ただひとつの具体的なものを指すのではなくて、抽象的なものを表すものだからだ。「花」ということばは、バラもユリもチューリップもすべて、その意味のなかに含ふくんでいます。それだけじゃなく、ジッサイにそこに咲さいているバラや、あっちに活けてあるユリも、「花」ということばで表すことができます。

A  
ことば以外のものには、この力はありません。たとえば、映像と比べてみよう。テレビに花の映像が映し出されている場合、別に辞書を調べなくても、その映像が示したいものは見ればわかります。でも、それはつねにどこかの庭やコウエンに咲②いている、ある特定の花を表しています。「このピンクのチューリップ」だったり、「その白いユリ」というふうだね。いま映っているピンクのチューリップを、あの赤いバラを表すのに使うことはできない。映像というのは、それをいくらたくさん見ても、個々の具体的な「事例」についての知識が増えるだけで、一般的な「映像能力」みたいなのをアップさせることはできないんだ。だから、映像だけでは、ことばのように自由に思考を組み立てることはできない。

B  
本を読んで、自由に使いこなせることばの数や表現の種類を増やしていけば、思考する力や世界を理解する力を高めることができる、という考え方には、だから十分な理由があると僕は思う。そういう意味で、「文字は人間を自由にする」というのは正しい、と考えているんだ。

読み書きができる能力のことを、「リテラシー」literacyと言います。あるいは、人口のなかでどれくらいの人が文字を読み書きできる能力をもっているかという割合を指して、「リテラシー」ということもあります。この場合は、日本語では、「識字率」<sup>③</sup>と訳したりもする。

いまでは、読み書きができるのは当たり前のことになってしまったけど、一九世紀のはじめには、日本でもヨーロッパでも、読み書きができない大人は大勢いたんだよ。みんなが通っている「学校」<sup>C</sup>という制度は、もともと、社会のすべての人びとが、「読み書き」ができるようにしようということを目的につくり出されたものなんです。みんなが自由にものを考えたり、表現したりする力を増すことにつながるからだね。いまでは、その意義を忘れかけてしまっているみたいだけれど、もともと学校は人びとを自由にするための社会のしくみなんだ。

そして、みんなが読み書きする力をもち、自分の精神の力を発揮して、自由を実現していこうという思想を、「啓蒙思想」<sup>けいもう</sup>と言います。歴史の時間に習ったと思うけど、ヨーロッパだと、ルソーやヴォルテールなどの「百科全書派」<sup>ひやくかぜんしよは</sup>と呼ばれる人たち、日本だと明治の思想家の、福沢諭吉や中江兆民<sup>ゆきち</sup>といった人たちだよ。そしてその延長上<sup>D</sup>につくられているのが、近代民主主義だ。自分たちのことは自分たちで考えて決めていこうっていうしくみだからね。そう考えると、文字の力はけっしてあなどれない。

だからこそ、新しい「テクノロジーの文字」についても、僕たちがこれまでの文字について身につけてきたような「リテラシー」が必要なんだ。それが今さかんに言われている「メディア・リテラシー」という問題というわけです。このことについては、最後の回でまた少しだけ考えることにしたいと思うけど、もしかしてそういう意味で「啓蒙」<sup>C</sup>が必要なのは、知識人なのかもしれない。

でも知識人よりずっとうまくメディアを使いこなしている君たちも、新しいリテラシーをもっとみがかく必要があると思う。

### III

モモ

の親友の道路掃除夫<sup>そうじふ</sup>のベッポは、とっても長い時間をかけて考えた末にやっと返事をするという人物だったし、もうひとりの親友のジジは、自分で想像しているんな物語をつむぎだす空想家<sup>そくじ</sup>だったね。

### IV

ツイッターやケータイのメールみたいな、短い文章を即時<sup>そくじ</sup>にやりとり

することが当たり前になっているような状況<sup>じじょう</sup>のなかでは、そんなふうになっふりとした時間を使って自分のペースで話をしたり、空想の翼<sup>むすぶ</sup>を広げて長いお話をつくったり、というようなことはたしかにますます難しくなってきた。

新しいテクノロジーの文字を本当に「読み書き」することができるようになって、はじめて僕たちは新しい「自由」を手に入れることができる。「テクノロジーの文字」を使って、じつくりと物事を考えたり、想像を広げていくことができるようになるはずなんだ。そのためには、<sup>E</sup> いったいどうしたらいいんだろうか。それが、これからの授業で、みんなと考えていきたいテーマなんです。

(石田英敬『自分と未来のつくり方 ―情報産業社会を生きる―』より)

問一 ―部①～③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 本文中「X」「Y」に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア X 考える ・ Y 話す
- イ X 聞く ・ Y 話す
- ウ X 書く ・ Y 考える
- エ X 書く ・ Y 聞く

問三 本文中 **I** ～ **IV** にあてはまる語句として適切なものとしてそれぞれあとのア～カから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア さらに
- イ つまり
- ウ たとえば
- エ だけど
- オ だから
- カ なぜなら



問七 — 線D「その延長上」とありますが、「その」が指す内容を四十三字でぬき出し、そのはじめとおわりの五字を答えなさい。

問八 — 部E「じっくりと物事を考えたり、想像を広げていくことができる」とありますが、このように新しいテクノロジーを使いこなす能力を何と言いますか。本文中より十字でぬき出さない。(句読点、記号も字数に含めなさい)

問九 本文の説明を説明したものととして最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 文字や言葉を知ること、思考する力や世界を理解する力につながり、人々を自由にすると筆者は考えている。
- イ ルソーやヴォルテールら「百科全書派」と、明治時代の福沢諭吉や中江兆民の考え方は正反対の考え方をしていた。
- ウ ツイッターやケータイのメールは、非常に便利なので人との連絡手段や情報交換手段としてもっと利用されるべきである。
- エ 知識人はメディアをうまく使いこなしているので、私たちもメディアを学び、使いこなせるようにならなければならない。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A  
のろまなことが、けして悪いことじゃないっていうのを教えてくれたのは、父さんだ。

僕は、ひとと同じ速さでものごとを片付けられなかったり、答えを見つけられなかったりすることがある。それもけっこうしょっちゅう。なぜかは、わからない。たぶん、速度のせいじゃないかな。ひとが、生まれつきもってる、生きる速度。

僕のそれは、他のみんなのより、ちょっとだけ遅いんじゃないか。

小学校にあがってしばらくした頃、そのことに思いあたった僕は、決心した。

B  
みんなと同じスピードで給食を食べられるよう、訓練をほどこすことにしたのだ。

夕飯のおかずを、給食の配置に似せて、目の前にきちんと並べる。居間の置時計も、テーブルのまんまかにセットした。右手に箸、左手にはスプーン。箸でおかずをつまむ間に、スプーンでみそ汁をすくえば、時間をかせげるはずだった。

いただきます、のかわりに、秒針が12の位置にくるのを待って、僕は言う。

よーい、どん！

「かじお」

金時豆の煮たのを大皿からとりわけてくれながら、父さんが口をひらいた。昨日の晩から水にひたしておいた豆はふっくらと煮あがり、食卓の上でつややかな光を放っている。

「そりゃいったい何のまねかな」

「X」だよ、早く食べられるように。あ、僕はお豆はいいや。おいしうんだけど、上級者用のおかずだから、今日はやめとく」

「上級？」首をかしげる父さんに、僕は早口で説明した。

「食べるのがむずかしいってこと。給食にはめったに出ないしね」

「おかずに上級者用も初心者用もないと、父さんは思うけどな。だいたい、なんだって早く食わなきゃならない？」

「それは……早く食べ終われば、校庭でみんなと遊べるしさ。図書室で本も読めるし」

こたえながら、うらめしげに時計を見る。訓練中に、父さんと話してるひま、ないんだけどな。父さんも、時計の秒針を、珍しい動物でも見るような目つきでながめた。

そして、僕の左手から、おもむろに① スプーンをとりあげると言った。

「なあ、かじお。ゆっくり食べるってのもそう悪いことじゃないぞ。そのぶん、たっぷりいろんな味を楽しめるし、食べ物の色だって鑑賞できるところからな」

C 食べ物、いろ？ そんなの正直言って、どうでもいい。だいたい、口に入っちゃえば、色なんてごたませのまま、胃のなかにまっしぐらだ。納得いかない顔の僕に、父さんは「ほら、この金時豆だって」と、箸でひとつぶをつまんで見せた。

「よく見たら、どれも色や形が違うんだぞ。そんなことに気づかないまま食っちゃまうなんて、もったいないじゃないか。ああ、かじおは損だ。人生の楽しみ半減だな、うん」

「そんな、おおげさなんだから……」

ひとりで納得している父さんに呆れつつも、そう言われると、なんだか気になってくるではないか。ためしに、小鉢の煮豆をのぞきこんでみる。

ほんとだ。いろんな色がある。あかるい茶色や濃い赤茶。綺麗なまだら模様には、皮に皺のよったのや。噛んでみると、歯ごたえも味もそれぞれ微妙に違う気がした。そんな発見の後であらためて見る豆は、なぜだかいいものか、おいしいものが寄りそって見えるから、ふしぎだ。

僕は、あのとき、教わったんだと思う。

人生で出会ういろんなものは、形や色の違う豆みたいなものだって。ひとつぶひとつぶのんびり味わったほうが、さっさと飲みくだすより、おいしいかもしれない。

もともと根気がないのも手伝い、僕は、早食い強化訓練をあつさり放棄してしまったのだった。

父さんの仕事は料理研究家だ。父さんの料理は世界一おいしい(と、ときどき口にださないと、父さんは世にもうらぶれた顔になる)。おかげで僕の背丈だけは、ジャックと豆の木みたいによきによき伸びちまった。高校生になった今も、そのうち葉っぱや枝が生え出すんじゃない

いかってくらい伸びつつづけてる。

教師の声が、聞きなれた名を呼んだ気がした。凧いだ海面を吹き抜ける風みたいなのに、耳もとを通りすぎていく。まさにそのとき、頭の中の海に、釣り糸を投げるところだったのだ。そろそろイシモチがかかる頃かな。帰ったら、釣具の手入れをしなきゃなあ。

そんなことを考えていると、隣の席の香坂に、ひじでつつかれた。

「ほれ、モー。おめえだよ、さされてんの」

その瞬間、釣り糸は竿ごと、ぼちゃりとまぶしい夏のおっこちてしまった。

「真下。真下かじお。聞いてんのか。新学期早々ぼんやりしてないでさっさとこたえろ」

なるほど、僕の名だったか。どうりで聞き覚えあつたはずだ。納得して立ち上がり、黒板をながめた。そこには、現在完了だの知らない単語だのが複雑に入り組んだ英文が書かれている。白いチョーク跡は、尻尾をつかませまいとうねるウナギに似てる。

「えーっと……」じつと、黒板を見つめた。

「……」教師もクラスのやつらも、僕がこたえるのを待っている。待たれてると思うと、焦るやら申し訳ないやらで、ますます頭の中のウナギは逃げまわる。

「まだか。わかんないのか。どっちだ」

「もうちょっと」と、僕はねばった。頭と尻尾をつかむことが肝心なんだな。心に言い聞かせ、主語と述語を自分なりに落ち着いて並べ替えようとしたそのとき、教師がじれたような声で、待ち時間に終止符をうった。

「もういいっ。おまえの答えを待っていると日が暮れちまうからな。次、植田」

「なにしろモーだからさ、こいつ。スロウ、モ」

教室の誰かがふざけて、牛の真似をする。他のみんなが、つられて笑う。もうちょっとだったのに……。思わず僕がゴネると、くすくす笑いがさらにひろがっていく。



問三 — 部B 「そのことに思いあたって」とありますが、どのようなことに思いあたってののですか。本文中の言葉を使って十七字以内で答えなさい。

問四 本文中  X に入る語句を、本文中より二字でぬき出して答えなさい。

問五 — 部C 「食べ物の、いろ？」とありますが、なぜ、「色」ではなく「いろ」と表現されているのですか、その説明として最も適切なものをあとのア〜エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 父が作る料理には、色彩があまりなく色について言われたところで見ようとしても見ることにすらできないから。  
イ 突然、父に食べ物の色について言われたので、うまく聞き取ることができずに頭の中で繰り返しているから。  
ウ 父が言った食べ物の色というのが、僕にとって意外なことで一瞬何を言っているのか理解できなかったから。  
エ 食べ物にだって色があるのは当たり前前すぎて、そんなことを言う父の考えが分からず、不思議に思ったから。

問六 本文中の  つつも と同じ用法の「つつも」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず書きなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とする。

問七 本文中に「 Y 」に入る一文として最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア しかし何があっても、のろまを克服しようと決心した。

イ そしてますます、食べ物の色を意識するようになった。

ウ そして最後には、のろまを克服できた。

エ そしてあいかわらず、のろまのまんまだ。

問八 本文から分かる「僕」の性格や特徴として適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 箸とスプーンを一緒に使って食べる練習をするなど、時間を有効に使わないと気が済まないせっかちな性格。

イ 食べるときに置き時計を使うなど、少しでも自分の計画が狂ってしまうとイライラしてしまう几帳面な性格。

ウ 時間がかかっても問題を解こうとし、周囲から笑われてもゴネて納得するまで取り組もうとする頑固な性格。

エ からかわれたり、茶化されたりすると怒りを感じるような正義感が強くて、正しいことを貫こうとする性格。

問題はこれで終わりです。